

て名前を付けてもらってはいても、実際には身元不明で誰でもない、という悲しみがある……。そんなことを思いながら、まず“Jane Doe”のほうを書いたんですけど、そっちを書き上げたところで、こうなってくると相方の“John Doe”もいないと駄目だな、と気付かされて。で、さらには“John & Jane Doe”という曲まで作ってしまって、どんどんややこしいことになってきて（笑）。自分が何者でもないというか、そういう感覚ってあるじゃないですか。アイ・アム・ノーバディ的な感じというか。

——ええ。誰かにとってはノーバディだけど、他の誰かにとってはサムバディだったり。

高野：うん。だから、もしかしたらこのバンドを知らない人にとっては俺たちもジョン・ドウ5人組だったりするんだろうし、そういうメッセージもあるような、ないような。なんか自分でもよくわからなくなってくるんですけどね（笑）。

——特定の誰かを登場人物として具体的に描くことでリアリティを得られることもあるはずですけど、逆にそれを名無しの権兵衛にすることで受け手側の想像力をいっそう掻き立てる、というのもあるはずだと思うんです。

高野：うん。しかもなんか、名前としての響きも綺麗じゃないですか、ジェーン・ドゥって。それがなんかパツと浮かんじゃったんで。もちろん厳密に言えば、『THE WILD BUNCH』の世界のなかに置くには、ジョンとジェーンのストーリーというののはちょっと時間軸としてはズレてると思うんです。前者は1800年代でもいいはずのものだし、後者は1990年代、むしろ2000年代っぽいかなとも思うし。

——ええ。だから往年のマカロニウェスタンみたいな映像と、『Twin Peaks（ツイン・ピークス）』（1992年公開のアメリカ映画）みたいな世界が入り交じっているような感覚があります。

高野：そうですね。確かにデヴィッド・リンチっぽい感じかもしれないですね、ジョンとジェーンの物語というのとは。

——しかも何故か現代に近いほうがモノクロの画像だったりするというか。僕自身も単純にイメージだけでモノを言ってますけど（笑）。

高野：ああ、うん。そうかもしれない。『THE WILD BUNCH』の世界のほうがむしろギラギラしてる色鮮やかな感じがある。そうやって今回は、時間軸も色味も違うストーリーがひとつに繋がってるというか、なんとか一応繋ぎました、という感じですね。

——でも、物語ができていったのは曲が揃ってきただけだったわけですよね？

高野：うん。ただ、全体のストーリーの流れは、曲ができあがってきただけで、最近ね、曲を思い付いたらすぐ歌詞も書くようにしてるんですよ。以前はまず曲が形になっていって、メンバーとのアレンジも進んでいくなかで詞を書き始めたりとか、もしくはもう完全にアレンジができあがってから言葉を載せていたりしてたんだけど、最近はもう、家で曲を思いついた瞬間に歌詞も同時に書き始めてるようなところがあって。なんとなくオープニングのリフからサビぐらいまでできてきたら、そこでもう書き始めてしまう。で、みんなの前で披露する頃にはなんとなくもう歌がある、みたいな。そういう書き方になってくるんです。だから、以前だったら言葉や物語の断片をパズルみたいに繋ぎ合わせてたんだけど、今回はもう、それが同時に揃いつつあった。だから、そうやって全体の流れが決まったうえで、後から足りないところを埋めていくだけ、みたいな作り方でしたね。で、物語の最後の曲として、11曲目に入ってる“Perfect Strangers”ができた後に、これでアルバム終わってもいいんだけど、なんかこれだと2ndアルバムと終わり方がちょっと似てるな、と気付かされて。そこで今回は、ちょっと違う終わり方したいなと思って作ったのが、12曲目の“Que